

史跡万富東大寺瓦窯跡 発掘調査現場公開資料

岡山市教育委員会

日時：令和4年7月9日（土）

場所：岡山市東区瀬戸町万富（発掘現場）

〇はじめに

岡山市教育委員会では、史跡万富東大寺瓦窯跡の発掘調査を6月上旬より実施しています。このたび調査も終盤に入り、発掘成果を公開する運びとなりました。今回の調査は大寺山地区の南側において、窯の正確な位置や規模、また未知の遺構の検出を目的として行っています。その結果、今年度は3基の瓦窯を確認するに至りました。

〇史跡万富東大寺瓦窯跡の概要

史跡万富東大寺瓦窯跡は、岡山市東区瀬戸町万富に所在しています（図1）。今から約800年前の鎌倉時代初頭、俊乗坊重源が主導し東大寺再興のための瓦を焼いた窯跡として著名であり、昭和2(1927)年に史跡の指定を受けています。遺跡は大寺山地区と上の山地区に分布しており、昭和54(1979)年に岡山県教育委員会、平成13・14(2001・2002)年に瀬戸町教育委員会により発掘調査や科学探査が行われています。その結果、少なくとも14基以上の瓦窯が存在することが分かり、管理棟と考えられる礎石建物や工房などの関連遺構がみつかっています。



図1 遺跡および調査区の位置

現在、岡山市教育委員会では史跡の保存と活用のための史跡整備を計画しており、それに係る発掘調査を昨年度から継続して実施しています。過去の調査との整合性を確認しつつ、指定地内の解明されていない部分の発掘を行いながら、遺跡の全容把握に努めていきます。

○調査成果

今年度の調査は、昨年度の調査区（トレンチ1）の北側にトレンチ2を、西側の1段下がった平坦面を南北にのびる調査区にトレンチ3を設定しました（図2）。

過去の調査では、トレンチ2で瓦窯が3基、トレンチ3では工房跡と考えられる遺構などが見つかっています。今年度は、それらの遺構の詳細な規模や構造を把握するために調査を行いました。

●トレンチ2の調査成果

トレンチ2では過去の調査と同様に3基の窯を検出しました。その中でも1番残りがよかったのが北端の13号窯です。瓦窯は残存長6.3m、最大幅2.5mあり、煙道・焼成室・燃烧室・焚口で構成されます。煙道は長さ約0.6m、幅0.3mに復元でき、煙が通る穴は本来3本分あったと思われます。焼成室と燃烧室を分ける隔壁は未発見ですが、側壁の構造から、焼成室は長さ4.8m、幅2.5m程度と推定されます。検出面から約1m下には分焰牀（ぶんえんしょう）が確認できました。粘土と瓦からなり、4条程度に復元されます。側壁は垂直に構築されています。分焰牀と同じ高さで段が確認でき、その上には磚（せん）が立てて置かれていました。燃烧室は長さ0.5m、最大幅2.4m程度となり、焚口に向かって狭くなっています。その外側には灰や炭、瓦片を多く含む層が堆積しており、灰原（はいばら）と考えられます。

●トレンチ3の調査成果

トレンチ3では、不整形の土坑や灰原が確認できました。

○出土遺物について

遺物としては、平瓦が最も多く、次いで丸瓦になります。軒平瓦・軒丸瓦については皆無に近い状況でした。平瓦の中には「東大寺」の刻印を持つものもありました。その他の遺物としては土師器、瓦質土器、備前焼、石硯片等が見つかっています。

○おわりに

今回の調査では窯跡とそれに付随する遺構の検出ができました。とくに13号窯について良好な残存状況に加え、他の窯と異なる部分が多いことは今後の調査・研究に大きな意味を持ちます。どの順番で窯が構築されたのか、窯の形態や出土遺物を照らし合わせる作業が必要です。来年度以降も史跡内の遺構の構成や分布を明らかにするための調査を行う予定です。

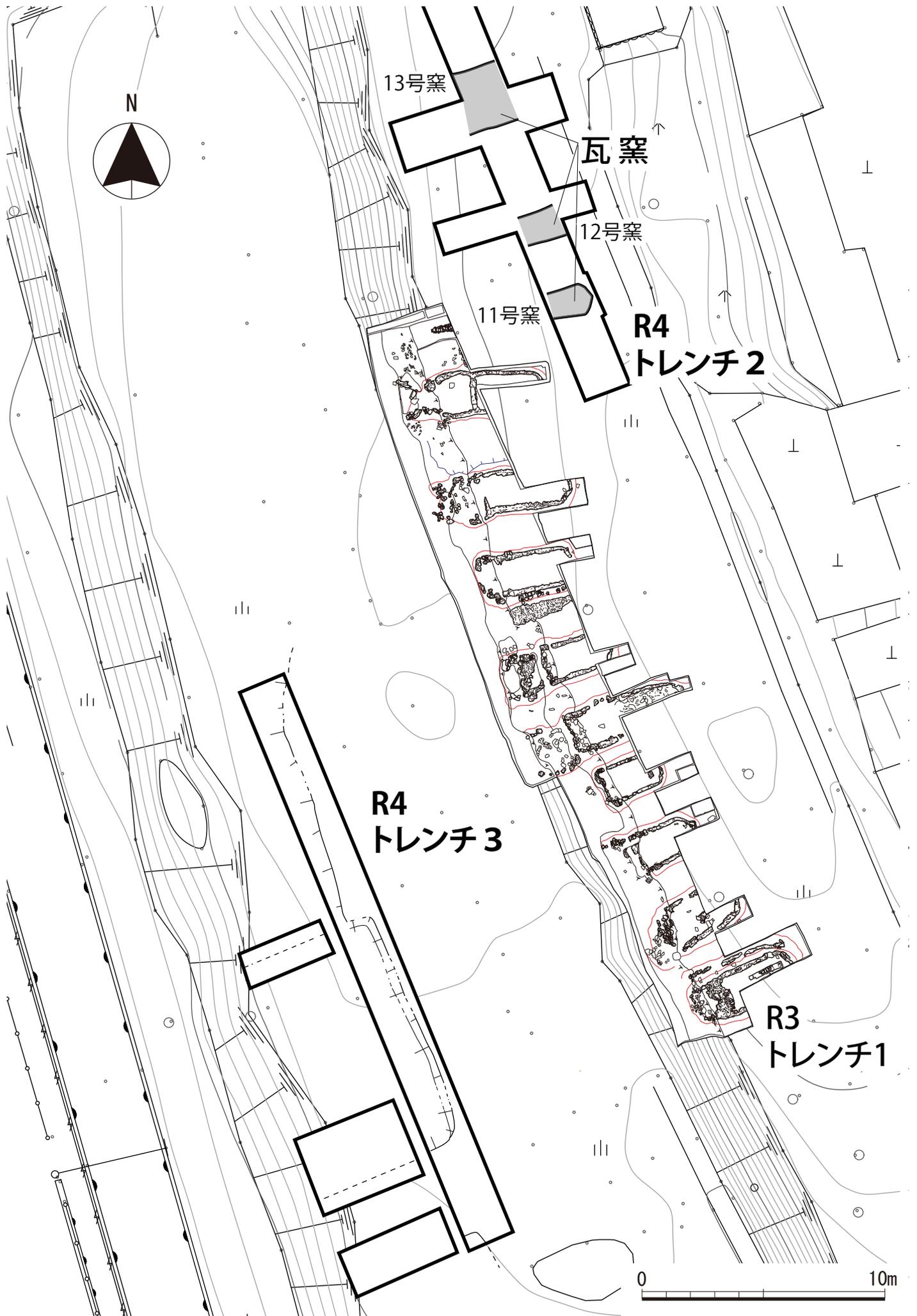


図2 調査区の配置と瓦窯の分布

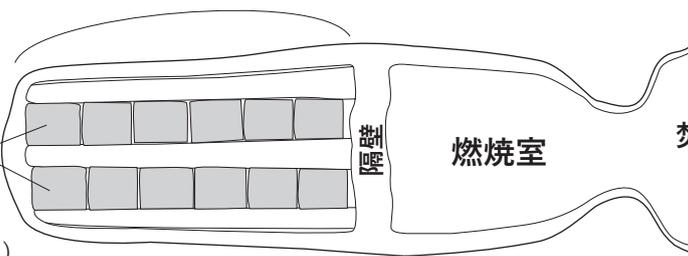
焼成室

- ・窯の壁や床は粘土やスサを混ぜたものからなり、平瓦も利用される
- ・粘土などは被熱を受けて灰色に硬化する

分焰牀

(ぶんえんしょう)

- ・粘土や瓦を積み上げた
畔状の高まり(ロストル)
- ・火のめぐりをよくする



焚口(たきぐち)

- ・「ハ」の字に開口する
- ・大きめの石材の使用もみられる

図3 瓦窯の各部名称

西暦	和暦	事項
1180	治承四	源平の争乱で東大寺が焼ける。
1181	治承五 養和元	重源、造東大寺勸進職に任命される。東大寺大仏の螺髪を鑄始める。
		平清盛が死去。
1185	元暦二 文治元	「壇ノ浦の戦い」平氏が滅びる。
		東大寺大仏開眼供養。
1186	文治二	周防国が東大寺造営料国となる。翌年より、杣から木材を切り出す。
		重源、周防国に向いその帰途、備前国に立ち寄る。
1187	文治三	この頃、重源、周防阿弥陀寺創建。東大寺浄土堂を建てる。
		重源、備前国荒野開発を願出、その妨害停止を奏上。
1190	建久元	東大寺大仏殿上棟。
1192	建久三	後白河法皇が死去。
1193	建久四	播磨国・備前国が東大寺造営料国となる。この頃、備前国の荒野を開発。
1195	建久六	大仏殿・中門などが完成。東大寺供養が行われる。後鳥羽天皇、源頼朝が参列。重源、大和尚号を得る。
1196	建久七	東大寺領の備前国荒野を同野田荘との交換が認められ不輸地となる。
		宋の石工・伊行末等、東大寺大仏殿の石の脇土像、四天王像、中門の石獅子などを造る。
1197	建久八	東大寺大湯屋鉄湯船を造る。東大寺戒壇堂、八幡宮の造営。
1199	建久十 正治元	東大寺南大門の上棟。源頼朝が死去。
		東大寺法華堂を修造。
1200	正治二	東大寺開山堂を修造、尊勝院再建。
1203	建仁三	東大寺南大門の仁王像、運慶・快慶らにより造像。
		東大寺総供養。重源、活動の実績を『南無阿弥陀仏作善集』にまとめる。
		『備前国麦進未進並納所下惣散用状』に万富産の瓦を示す「吉岡御瓦」の字句あり。
1204	元久元	東大寺東塔の造立を開始。
1206	建永元	重源、東大寺浄土堂で死去(86歳)。

表1 東大寺再建関係年表